

Title	編集後記
Sub Title	
Author	金子, 晋丈(Kaneko, Kunitake)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2024
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.11, No.1 (2024. 3) ,p.88- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000011-0088

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

編集後記

金子晋丈

慶應義塾大学 DMC 研究センター副所長

理工学部准教授

DMC 紀要第 11 号をお届けします。

本年度のシンポジウムは、オープンサイエンス時代の研究データのあり方に関するものとししました。オープンサイエンスの潮流の中で、バズワードとしてのオープンサイエンスに振り回されることなく、本質的にどのような知がどのように流通すべきなのか、どのような社会システムでデジタル時代の知の流通メカニズムを作り上げていくべきなのかを、シンポジウムに参加されたひとりひとりが改めて考えた時間となり、そのトピックの奥深さに改めて気づかされた時間でもありました。本号に収録したシンポジウムの記録をご覧いただければ、講演とパネルディスカッションで言葉として表現された課題のみならず、さまざまな問題提起が読者のみなさまにも巻き起こり、シンポジウムの雰囲気を擬似的に体験できるのではないかと思います。

さて、世間では デジタルは当たり前となり、AI がブームとなっています。ドラえもんのような夢の AI 世界が一足飛びにやってくればよいのですが、あいにくそうでもありません。一方で、デジタル技術を手作りし、技術を理解する雰囲気も一時期に比べて遠のいたようにも思います。時間はかかるかもしれませんが、人間・社会と技術をとともによく理解することが、本質を伴った未来への近道なのではと思うようにしています。

DMC の今後の活動にご期待ください。